

関心を抜きには考えられない。同じ対象であってもその扱い方が関心の変化に伴って変わるものである。演劇観が変わっていくということは、このような側面からみえるのではあるまいか。

植民地経験や国家と文化の関係を語る際に体系的な記述を試みることは容易でない。性急に統一的な理論化を企図するよりも、局地化された実践の理論を歴史的に記述し、個別の解釈を試みる作業が提唱されて久しい。本稿がその一考察として今後の研究につながれば幸いである。

中世の「騎士」の理想について

— 盛期中世のドイツを中心に —

有 信 真美菜

ドイツとフランスにおいて、盛期中世は俗語による文芸が開花した時期であった。この時代の文学作品、特に騎士文学の中で、気高く立派な、理想的な騎士というものがよく描かれた。この騎士というものは物語

の中だけの存在ではなく、当時の騎士修道会や、社会階層の一つとしての騎士身分が示すように、現実存在するものであった。このような状況下で、騎士の実像及び騎士の理想とはどのようなものであったのか。

この時期において「騎士」という語を用いる場合、少なくとも二つの用法があることを考慮しなければならない。現実の社会身分としての騎士、そして社会身分の実情にとらわれない、文化的カテゴリーとしての騎士である。中世ヨーロッパの騎士という一般的なには華やかな姿が想像されるが、この時代の騎士身分はドイツではミニステリアーレンを主体とする下層戦士階級であり、現実の社会では、同じ支配者階級の側に属しながら貴族から一線を画される、より低い身分の人々をさす卑しい呼称であったのである。その一方で、当時の宮廷文学の中で描かれた騎士は、主に高貴な生まれで倫理的に高潔な存在であり、騎士という語が大貴族や王に対しても用いられた。また、年代記における騎士の語の用例として、

一一八四年のマインツの宮廷集会の記述で皇帝フリードリヒ一世の二人の息子に対して騎士の語が用いられているが、これは刀礼を受けた者という意味であり、騎士身分とは切り離して考えなければならない。このことから、文学作品における「騎士」及び刀礼（騎士叙任）を受けた者としての「騎士」は、実際の騎士身分にはとらわれない、下はミニステリアーレンから上は皇帝や王までを含む、重装騎馬戦士としての職能に規定される理念的概念と言えるであろう。騎士の理想という場合の「騎士」は後者の方である。本来卑しい身分呼称でしかなかった「騎士」が何故高貴な人に対しても用いられるようになったのか。その要因として、一一、一二世紀におけるミニステリアーレンの社会的上昇による貴族への接近、そして文学作品や教会によって高尚な騎士の理想が形成され広められたことによる「騎士」の倫理的価値の上昇があげられる。

理想的騎士像は主に当時の俗語による宮廷文学、特に叙事詩の中で描かれたものに拠る所が大きい。文学作品に現実の社会の

忠実な反映を求めることはできないが、騎士の理想に関しては重要な史料である。当時の宮廷文化を背景として成立したこの宮廷文学は、主要な作品は宮廷の人々をパトロンとする職業歌人の手によるものであった。そのため、その創作が宮廷社会の人々の嗜好から自由であったとは考えにくい。

そして作品は詩人によって宮廷社会の人々の前で実際に歌われていた。従って、当時の文学作品は宮廷社会の人々の嗜好を反映し、また彼らはそのような文学の受容者として影響を受けていたと考えられるであろう。騎士身分は支配者階層の中で最下層に属したが、騎士の理想像はむしろ支配者階層の上層である宮廷社会と結びつく。貴族は騎士身分と融合することも、自分達を騎士と称することもなく騎士の理想を自分達に属する倫理意識として受容していた。このため、騎士の理想は宮廷社会という非常

に狭いサークルに属するエリート文化としての性格があった。

文学作品の中で描かれた理想的な騎士に求められていたことは、高貴な出自、裕福であること、名誉を求める心がけ、謙虚さ、有徳であること、誠実さ、勇敢さ、強さ、敬虔さ、物惜しみしないこと、弱者の保護、誠実さ、節度があること、気高さ、宮廷的振舞、外見の美しさといったことである。

これらの要素は多くの作品において共通するものがある一方で、必ずしも一定の型というものがない。騎士に求められる徳を詩人は好んで作品中で羅列したが、それらが体系化されることは決してなかった。

ドイツにおいて重要なのは、主要な宮廷文学の多くがフランスの先行作品を原典として成立していることである。このため、少なくともこの時代の文学作品に関してはドイツではある程度フランス文化を輸入する形で形成され、そのための中で描かれている騎士の理想もまた、フランスの騎士

文化の影響を受けていると考えられる。

実際の社会における「騎士的世界」の例として、皇帝フリードリヒ一世の一一八四年のマインツの宮廷集会がある。この宮廷集会は多くの年代記において記述があるが、それらのうちザンクト・ブラーズィエンのオットーの年代記とジルベール・ド・モン

スによる年代記を取り上げることにする。当時の宮廷集会は祝祭や議會を兼ねるものであり、非日常の世界であった。この宮廷集会では、まず皇帝の二人の息子（後の皇帝ハインリヒ六世とシュワーベン大公フリードリヒ）の騎士叙任式が行われ、引き続き祝祭と騎士の競技である騎馬上槍試合が行われた。この集会は各地から多くの人々が参加し、規模の大きいものであった。この年代記の記述を参考に、(1)騎馬上槍試合、(2)集会の参加者、(3)実現されている騎士の理想について検討する。

(1) 騎士の競技である騎馬上槍試合は、騎士の武勇が描かれるハイライトとしてよく文学作品中で記述され、現実に行われてい

たものであった。これは単に競技というだけではなく、実際の軍事訓練を兼ねていた。

「騎士」達は世俗領主階級であり、戦士階級であった。彼らの日常において、領土や戦利品を求めてフェーデが繰り返された。

また、当時決闘による神明裁判が行われていた。これは正しい方に神が味方するという考えによるものであった。このため自分の利益を守るためには武勇が必要であったのである。ただし、騎馬上槍試合は時として命を落とす危険なものであったこともあり、度々教会から非難された。

(2) フランス文化のドイツへの輸入経路を考える上で、この集会にフランス人の参加者がいたことが重要である。ジルベール・ド・モンスはエノー伯の宮廷に属していて、エノー伯に従ってこの集会に参加していたが、エノー伯領は神聖ローマ帝国の北西に位置し、宮廷ではフランス語が話され、ドイツへのフランス文化の流入口の一つとされている。また、フランス人の詩人ギョー・ド・プロヴァンがこの集会に参加していた。

(3) ジルベール・ド・モンスの記述に、参加者である諸侯や貴族が十字軍出征者や捕虜や芸人に贈り物をしたことが書かれている。これは騎士の徳である「物惜しみしないこと」が実践されている。

実際の社会において形成された騎士の理想として、教会によって広められたキリスト教的騎士の理想「キリストの騎士(miles Christi)」がある。これは聖書に由来し(『テモテ人への第二の手紙』二・三―四)、元は霊の力でキリスト教のために戦う人つまり修道士を指すものであったが、「神の平和」運動や十字軍に関連して、一一、一二世紀に俗人に対して用いられるようになった。剣で教会に奉仕する者としての騎士である。これによって、本来キリスト教的観点からは悪でしかなかった騎士の職能である戦闘行為が、聖戦の形で正当化されたのである。教会の保護、物惜しみしないこと、弱者の保護といったことは、元は君主に求められた徳であったが、これ

らがより下級の貴族の徳として転用されている。この理由として、領主に仕える人が自分の主人を称えるのに王や皇帝の徳を用いたということと並んで、封建制の下で王権や皇帝権が弱体であったため、このような保護義務を直接領主達に求めなければならなかったという事情があった。

以上のことから、盛期中世のドイツにおける騎士の理想がどのようなものであったかをまとめてみたい。騎士の理想における「騎士」は、実際の騎士身分の現状に必ずしもとらわれない理念的概念であった。多くは宮廷文学の中で形成されていたことから、当時の宮廷文学とその受容者にしてパトロンである宮廷社会の人々つまり貴族社会とが相互に影響を与える形で受容されるものであったと考えられる。また、このような状況から、騎士の理想は「騎士の宮廷文化(または「宮廷的騎士文化」)」の表現にみられるように宮廷社会と結びつき、エリート文化としての様相を呈した。そし

て、ドイツにおける宮廷文学を考慮する際、多くはフランス文学を輸入する形で成立していることから、フランス文化の影響を考える必要がある。

理想的騎士に求められる要素は、様々なことが羅列されたが、体系付けられることはなかった。そのためとらえどころのないものであった。騎士の理想は世俗倫理であったが、その一方で教会によるキリスト教的騎士の理想が同じ「騎士」に対して付与された。このことにより、本来相反するものである世俗的なものとキリスト教的なものが、一つの「騎士」の中に納められたのである。

「尾張元興寺跡出土軒瓦の系譜に関する一考察」

志賀 崇

瓦は六世紀末から我が国で使用された屋根葺き材の一つである。古代においては有力豪族が造営した寺院の堂塔や藤原宮をは

じめとする宮都、官衙などの官舎に供される特殊なものであった。近年の研究では、異なる遺跡間の同范・同系関係や製作技法の検討から、造営者間の関係や工人の移動さらには生産体制などが明らかにされている。ただ、七世紀後半以降に爆発的にその数を増す地方寺院のそれに関しては様々な制約で必ずしも充分に説明されていない。本論では瓦という限られた資料を基にして地方における寺院造営の一端を明らかにしていきたい。

本論では名古屋市中区、一部熱田区に所在する尾張元興寺跡の造営過程を検討した。本遺跡は熱田台地西端縁に立地し、周囲には断夫山古墳や熱田神宮がある。寺院創建に関する文献史料は存在しないが、九世紀後葉に焼失した尾張国分寺の機能をこの元（願）興寺へ移したことが『日本紀略』に確認される。

過去の本遺跡の調査では、後世の攪乱や開発によって明確な寺院遺構は未検出であるが、軒丸瓦九型式十一種、軒平瓦六型式

十一種が出土している。これらの軒瓦のうち、創建期と伽藍整備期に関連するものを取り上げ、製作技法などの詳細な観察により編年案を組み立てた。ただし、軒瓦以外の瓦については、今回詳細に分析し得ていない。

I期 NMⅠ型式（素紋縁素弁八弁蓮華紋軒丸瓦）、NMⅥ型式Ⅰ類（三重圏線縁六弁忍冬蓮華紋軒丸瓦）、NHⅠa型式（簾状四重弧紋軒平瓦）が当期に属す。当期の軒丸瓦の特徴は瓦当と丸瓦の接合に際し、丸瓦先端を片ほぞ形に加工する点である。軒平瓦は紋様が非常にシャープで明確に四重弧紋と確認できる。胎土・焼成・色調が類似し、同時期に生産されたものと考えられるが、出土点数は極端に少ない。NHⅢ型式（四重弧紋軒平瓦）も当期に属する可能性があるが、破片しか出土しておらず断定できない。

Ⅱ期 当期は二つの小期に分れる。Ⅱ-Ⅰ期はNMⅢ型式Ⅰ類（三重圏線縁素弁八弁蓮華紋軒丸瓦）、NMⅤa型式（四重圏